第 63 回　さよならわが師匠、そして親友

2015 年 8 月 24 日、15 年前まで東北大学呼吸器外科（東北大学抗酸菌病研究所外科から東北大学加齢医学研究所外科、同呼吸器外科と名称が変わった）の医局でともに仕事をした S 先生や K 先生からロサンゼルスのジャック　マトロフ　先生が亡くなられたことを知らされた。1975 年ロサンゼルスより帰国後毎年手紙やクリスマスカードのやり取りがあったが、この 2 年来返信が来ることなく気懸りであった。Jewish Journal には「心臓外科の先駆者 Jack Matloff 先生が 82 歳で亡くなられた」という大きなタイトルのもとにロサンゼルスでの葬儀の模様や、経歴も紹介されていた。

マトロフ先生は、ハーバード大学を卒業後ボストンの Peter Bent　Brigham 病院を経て、1969 年ロサンゼルスの Cedars－Sinai Medical Center へ移って心臓血管外科を開設して、その主任科長として 1998 年まで活躍され、現在、心臓外科の先駆者のひとりにあげられている。マトロフ先生のもとに 1970 年から 72 年まで筆者は肺移植を研究テーマにした文部省（当時）在外研究員として留学したが、肺移植実験のない日にはよく彼の心臓手術を見学したものである。筆者を身近な兄弟のように名前を“シゲフミ”と呼び、筆者もまた彼を“ジャック”と呼びながら話をすることが多かった。ジャックは、心筋梗塞患者に対する大動脈－冠状動脈吻合術（A-C バイパス）手術では径数ミリの細い冠状動脈に大腿静脈から採取した静脈移植片（静脈グラフト）の細かな吻合手術を巨漢の大きな手で巧みに行っていた。A-C バイパス術に限らず心臓弁置換手術などの Jack の心臓血管外科手術は確実でかつ重厚であり、その手技は帰国後の筆者の呼吸器の手術にも濃厚に反映していたのは明らかである。ジャックは、胸部外科におけるわが師匠のひとりである。病院がハリウッドにあったためか、当時世界的に有名な俳優のジャックによる手術もしばしば見学したことも記憶している。

ジャックは、週2回の肺移植実験に実験助手のジムをつけて、筆者の好きなようにさせてくれた。実験では術後生存が非常に困難であるとされた一期的両側自家肺移植後の長期生存例が得られ、肺移植の結果としておこる両側肺神経完全切断の影響に関する生理学研究が進んだ。その心臓血管外科のボスにより肺移植研究のために招聘された筆者は、同地での研究成績に基づいて数編の論文を完成し、有力な欧米誌に掲載できた。

Cedars－Sinai Medical Center は、1992 年アメリカ西海岸の医療施設のなかで最初の肺移植プログラムを行う施設のひとつになった。

筆者は、1963 年入局先の抗酸菌病研究所外科鈴木千賀志教授から「肺移植の研究」を命じられ、それ以来 2000 年自分自身が東北大学退官するまで、肺移植が最大の研究テーマとなり、漸く退官 3 日前にわが国で第1例となる右肺移植臨床例を成功裡に経験することができた。今は故人となられてしまった鈴木千賀志先生やジャック　マトロフ先生は、筆

者にとって呼吸器手術や血管手術の大切な師匠であるとともに恩師でもある。ロサンゼルスの Cedars－Sinai Medical Center 研究員としての留学については、これまで何篇か書き残してきたが、第二の恩師ともいえるジャックの死はあまりにも悲しく淋しい。

2015 年9月 11 日学生時代からの親友Sが亡くなった。彼は頭脳がよく切れ、話はウイットに富み、筆者にはないものを多く備えており、医学部学生時代からどちらかといえば尊敬の念をもって付き合ってもらっていた得難い友達であり、遠くにいても兄貴のような存在でもあった。彼とは学生時代には共に医学部演劇部に属し、楽しい思い出が多い。彼は数年前に病に倒れたが、今年3月末に学生時代、同じ医学部演劇部にいた現在佐渡にいる学部同級生Kとともに、無理を承知で、それぞれ東京に集まって3人で同宿し、会食したのが最後であった。

学生時代の医学部演劇部は、表（オモテ）と称する俳優や女優だけでなく、制作、演出、舞台監督や、裏方と称する大道具、小道具、衣裳、照明から効果まで全て自分たちで運営していた。表方に比べて、むしろ裏方の仕事の方が大変で、苦労も多かった。筆者は 1956 年医学部教養部に入学の年に演劇部に誘われて、亡くなってしまったその親友とともに入部し、その後佐渡出身の同級生が加わり、三人は特別気が合ったのである。筆者の学生時代（1956 年～1962 年）に関係した医学部演劇部が上演した演劇（芝居）を思い出してみると、「崑崙山の人々」（1956 年）、「みんな我が子」（1957 年）、「二十日鼠と人間」（1958 年）、「思い出を売る男」（1958 年）、「エピソード」（1959 年）、「商船テナシチー」（1960 年）、「毒薬と老嬢」（1960 年）などで、「崑崙山の人々」（飯沢　匡作）では 850 歳の仙人、「思い出を売る男」（加藤道夫作）では乞食の役をしたことを思い出す。「商船テナシチー」（ヴィルドラック作）では筆者が演出をし、「毒薬と老嬢」（ケッセルリング作）では上記の同級生 K が演出をした。体格・体型、マスク、声などが当時の有名な映画俳優を髣髴とさせる親友 S は、表方の出演が多かったのである。医学部演劇部の公演は、観客が 200 人程度の医学部講堂という小劇場であっても、舞台と観客が一体になって盛り上がることが多く、時に市内中央部の大劇場の労働会館（当時）での公演でも入場者が多く、出演者たちは張り切ったものである。演劇部での活動が本職の医学の勉強の妨げになることはなかったといってよい。

医学部卒業後はそれぞれ離れ離れになってしまったが、遠くにいても50年以上気心は変わらず、会えばいつも互いに学生時代の言葉で話をしたものである。

今年はその二枚目の親友も亡くなってしまった。悲しい。

マトロフ先生と学生時代からの親友の冥福を祈る。